

一週間に一回ならいいだろう？

ジェローム・デイヴィッド・サリンジャー

姚明遠 訳

荷物を片付けていた間、彼はタバコを口にくわえていた。煙が目に入らないように目を細めていたため、表情から彼がうんざりしているか困っているか、また怒っているか不安なのかわからなかった。一人の若い女性がお客さんみたいに、大きな男性の椅子に座っていた。朝の日差しが彼女の顔にまだらに影を落としていたが、彼女はやはり美しい。彼女の美しさはそこなわれなかった。しかし最も美しいのは彼女の茶色に焼けた、まろやかでたくましい腕であったかもしれない。

「あなた」と彼女は言った。「どうしてこれら全部をビリーに任せられないかわからない」

「なんだったって」と若者は言った。彼の声はチェーンスモーカーのようにくもっていた。

「どうしてこれら全部をビリーに任せることができないのかわからない、と言っているんだけど」  
「彼は歳を取りすぎている」と彼は言った。「ラジオつけたらどう？ 録音済された音楽をやっているかもしれない。一〇一〇を試してみよう」

若い女性が後ろに手を伸ばした。指に黄金の結婚指輪をはめていた。隣の小指に一枚大きいエメラルドの指輪をつけていた。彼女がいくつかの仕切り部屋の扉を開き、パンパンと叩き、また何かをひっくり返した後、椅子に戻って座り、急に隠そうともせずあくびをした。若者は彼女をちらりと見た。

「はじめるには何てひどい時間なんでしょう」と彼女は言った。

「彼らに伝える」と若者が一重ねの畳んであったハンカチをチェックしながら言った。「今出発するのがまずいと妻が言った」

「あなた、あなたがいなくなるとひどく淋しいでしょう」

「僕も君のことを会いたくなる。これらよりもっとたくさん白いハンカチを持っている」

「本気よ、きっと淋しく思うわ」と彼女は言った。「全部本当に嫌だわ、全部」

「まあ、そういうことだ」と若者は言いながら、背囊を締めた。彼はタバコに火をつけ、ベッドを見て、そしてまっすぐベッドの上に倒れた。

彼が手足を伸ばした時、ラジオがウォーミングアップをした。スーザのマーチが特有の終わらないフルートの楽節で部屋を完全に占領した。彼の妻は素晴らしい腕を伸ばし、それを止めた。

「他の音楽があるかもしれない」

「こんな変な時間にはない」

若者が天井に向かってさほど丸くないスモークリングを作った。

「君は今起きる必要はない」と彼は彼女に言った。

「そうしたかったから」

彼女は三年間ずっと彼に強調のような口調で彼に話をした。

「起きないで」と彼女は言った。

「五七〇を試してもよう」と彼は言った。「なんか流れているかもしれない」

妻がラジオをもう一回つけた。彼らは待っていた。彼は目を閉じていた。少し経ったら、ちゃんとしたジャズが流れてきた。

「あのさ、あなた今こんなふうに寝る時間があるの」

「こんなふうに寝る——そうだよ、まだ早いから」

急に妻はある真剣な考えが浮かんだようだった。「あなたを騎兵隊に入れてくれたらいいのに。騎兵は本当に素晴らしい」と彼女は言った。「彼らのえりにつけている小さな剣の飾り物はとてもいい。あなたも乗馬が好きだし」

「騎兵隊」若者は目を閉じながら言った。「そんなこと起きる可能性は少ない。この頃ではみんな歩兵隊に行く」

「それはひどいわ、あなた。顔に何か付いている人に電話してほしいわ。あの大佐に。先週フィリーとケニーにいた人。情報省か何かの。あなたはフランス語もドイツ語もできるから。彼はあ

なたを少なくとも将校に任官する。だって、兵卒などになったらどんなに哀れなことだかあなたもわかるでしょう。だってあなたは人と話すことすら嫌だから、全部のことが嫌だから」

「お願いだ」と彼は言った。「その話はもうやめよう、もう話しただろう、将校のこととか」

「まあいいわ、少なくともあなたをロンドンに行かせてほしい。そこには文明人がいるから。バビーのA P O番号を持っていますか」

「うん」と彼は嘘をついた。

彼の妻はもう一回深刻な推測をしているようだった。「何か材料がほしい。ツイードとか」そして突然あくびをし、間違った話をした。「おばさんにお別れを言ったか」

夫は目を開き、すつくと座った。足を地面に下げた。「バージニア、聞いてくれ。昨夜彼女に別れを言うチャンスがなかった」と彼は言った。「毎週一回彼女を映画館に連れてほしい」

「映画」

「そのぐらいいいだろ」と彼は言った。「一週間に一回ぐらいならいいだろ」

「もちろんそうだけど、あなた。でも」

「でもと言うなよ」と彼は言った。「一週間に一回ならいいだろう」

「もちろん彼女を連れて行くわ。私が言いたいのは――」

「この要求は難しくない。彼女はもう若くないし」

「でも、あなた。いやその、彼女の状態はまた悪くなっている。つまり、彼女はとてもおかしい。

これは全然面白くない。あなたは彼女と一日中部屋にいたことがないでしょう」

「君も」と彼は言った。「それに、僕が彼女をどこかへ連れて行かない限り、彼女は部屋から出な

い」彼は彼女に近づいた。もう少しでベッドのへりから落ちそうだった。「バージニア、一週間に

一回ならいいだろう？ 冗談を言っているわけじゃない」

「もちろん、あなた。もしあなたがそう望むのなら」

若者は急に立ち上がった。「僕は今朝ごはんを食べるとコックに伝えてくれる？」と彼は言い、

どこかへ行こうとした。

「まずモーニングキスをしましょう」と彼女は言った。「少年兵」

彼は身をかがめ、彼女の素敵な口にキスした後、部屋を出た。

彼は広くて厚いマットが敷かれている階段を上り、階段の一番上で左に曲がった。二つ目のドアを二回ノックした。ドアの外側にニューヨークの古いウォルドーフ・アストリアホテルからの正式な白いカードがびょうで留めてあった。カードには「起こさないでください」と書いてあった。カードの縁にはインクで小さい色あせた字があった。「リバティー・ボンドのラリーに行く。戻る。六時私の代わりにトムとロビーで会って。彼は左肩が右肩より高く、可愛い小さなパイプでタバコを吸う。愛を込めて、私より」これらはこの若者の母への伝言であった。彼がまだ男子の時に読み、それからも百回読んだ。今、一九四四年三月、彼はもう一回読んだ。

「入って、入って」と忙しい声が聞こえて来た。若者は入った。

窓の隣に、五十代前半の綺麗な女性が折り畳み脚のカードテーブルのそばに座っていた。彼女は素敵なベージュ色のモーニングガウンを着、非常に汚い白いスポーツシューズを履いていた。

「さて、ドイツキー・キャムソン」と彼女は言った。「どうしてこんなに早く起きたの、この怠け者」

「いろいろありまして」と若者は軽く笑いながら言った。彼は彼女の頬にキスし、何気なく片手を彼女の椅子の背もたれに置き、彼女の前に開いていた大きな革装の本に目を通した。「このコレクションはどうですか」と彼は聞いた。

「素晴らしい、本当に素晴らしいわ。この本——あなたまだ読んでないわ、あなたのひどい子ね——全く新しいのよ。ビリーとクックはそれらを全部私に取っておいてくれるの。あなたの分は私に残してもいいわ」

「廃止されたばかりのニセントの切手<sup>三</sup>ですか」と若者は言った。「いいアイデアですね」  
彼は部屋を見回した。「ラジオはどうですか」

ラジオは彼が下の階段にいた時と同じチャンネルに合わされていた。

「とてもいいわ。今朝運動したわ」

「さて、リナおばさん、そういう無理な運動しないで、と言いましたよね。だってあなたは自分を傷めてしまうから。つまりそんなことをするのは無意味です」

「私は好きよ」とおばさんはアルバムの一ページをめくりながら、きっぱり言った。「これらに合わせた音楽が好きよ。全部古い曲だから。運動せずに音楽だけを聞くのはよくないと思うの」

「大丈夫ですよ。今は止めてください。そんなになんでも全部やるのはやめましょう」と甥が言った。彼が部屋を少し歩きまわった。そして窓辺の椅子に重々しく座った。彼は外を望み、公園を見通し、森を見ながら、自分がもうすぐ旅立つことを彼女に伝える方法を考えていた。彼女が一九四四年にもう誰かの砂時計を見なくていい女性になってほしいと彼が望んでいた。今自分の時計を彼女に渡さなければいけないと彼はわかった。この汚い白いスポーツシューズを履いている女、廃止された二セント切手のコレクションを持っている女、自分の母の姉、古いウォールドーフ・アストリアホテルの「起こさないでください」のカードのへりに母に伝言を書いた女に、プレゼントをしなければいけない。彼女に教えなければいけないのか。彼女が彼の馬鹿げた小さな

砂時計を見なければいけないのか。

「あなたが額をこうするとあなたの母親にそっくりよ。本当よ。彼女にそっくりわ。彼女を少しでも覚えている、リチャード」

「はい」と彼がゆつくり言った。「母はいつも歩かずに走っていました。そして部屋で少し休みました。彼女は私の部屋のブラインドを下ろす時、いつも口笛を吹いていました。大抵同じ曲でした。僕が幼い頃ずっと頭の中に流れていましたが、大きくなると忘れてしまいました。その後大で、メンフィスからのルームメイトがいました。ある日の午後、彼が何かの古いレコードプレーヤーを流していました。ベッシー・スミスのもものとテイー・ガーデンズのものでした。その中の一曲が僕を驚かせました。それは母が吹いた曲でした。間違いない。曲名は『私は日曜日でもおとなしくできない、だって私は週七日間悪い子だから』。アルチレイビーというやつが期末に金つまりで、それを踏んでしまったので、それ以来この曲を聞いたことがありません」彼は話をやめた。「覚えているのはこのぐらいだけです。全部バカなことです」

「彼女の顔は覚えていますか」

「覚えていません」

「彼女は荷物みたいだった」と彼のおばさんは細くて優雅な両手で顎を支えた。「もしあなたの母が行ってしまったら、あなたのお父さんは一人で人間らしく部屋にじっと座っていられなかった。話しかけられても白痴のようになさくだけで、小さくて変な目であなたの母が去ったドアをじっと見ていました。彼はおかしくてとても粗野な小さい男でした。金儲けとあなたの母をじっと見ることのほかには、何も興味がないのだ。あと彼が買った変な船であなたの母を連れて海へ出帆する。変な小さいイギリスの水兵帽をかぶっていました。水兵帽は彼の父のものだと彼は言っていました。あなたの母はよく出航しなければいけない日にその帽子を隠していました」

「彼らが見つけたのはそれだけです。そうですね」と若者が聞いた。「あの帽子」

しかし、彼のおばの目は彼女のアルバムのページに落ちた。

「まあ、これは本当に綺麗ね」と彼女は一枚の切手を日差しに当てながら言った。「彼の顔はこん

なに強健でした。殴られて歪んだような鼻がついている顔でした。ワシントンよ」

若者は窓辺の席から立ち上がった。「バージニアがコックに朝ごはんの準備をさせたので、僕は下に行ったほうがいいです」と彼は言った。しかし、彼は去らず、お婆のテーブルの前に来た。

「リナお婆さん」と彼は言った。「ちよつと話をさせて」

お婆の賢そうな顔が彼に向けられた。

「お婆さん、そのう、戦争が始まっているんです。あのう、あなたはもうニュース番組やラジオで聞きましたよね」

「もちろん」と彼女は鼻であしらった。

「さて、僕は行くんです。僕行かなければいけない。今朝行きます」

「あなたが行かなければいけないとはわかっていました」とお婆は苦しくもなく感傷的でもなく、慌てずに「最後の一人」と言った。

彼女は素晴らしいと彼は思った。彼女がこの世の中で最も理性のある女だ。

若者は立ち上がり、砂時計をそつとテーブルの上に置いた。これが唯一の方法だ。「まあ、バージニアはよくあなたを会いに来ますよ」と彼は彼女に言った。「彼女はよくあなたを映画館へ連れて行きます。サットンには来週 W・C フィールズの古い映画が来ます。フィールズが好きですよね」

お婆も立ち上がった。しかし、彼女は素早く彼のそばを通った。「あなたの紹介状があります」と彼女は言った。「私の友達への」

彼女は今書き物テーブルの隣に立ち、左手の一番上の引き出しをしっかりと開け、白い封筒を取り出した。そして再び切手集が置いてあるテーブルに戻り、さりげなく封筒を甥に渡した。「まだ封じていないので、あなたが読みたければ読んでもいいわ」

若者は手に持っている封筒を見た。封筒にはお婆のトマス・ロクリーフ少尉あての力強い手書きがあった。

「彼は素晴らしい青年です」と彼のお婆は言った。「六十九中隊にいます。彼はあなたの面倒を見

てくれるから、私は少しも心配していないわ」彼女は強調するように加えた。「二年前こういうことになるとわかっていたから、すぐトミーを思い出した。彼はきつと至れり尽くせりの配慮をしてくれるでしょう」

彼女は振り向いた。今回はゆっくりと。そして前のようにそんなに急がずに彼女の書き物テーブルの隣へ歩いた。

彼女はまた引き出しを開き、若い男性の大きな枠付き写真を取り出した。彼は一九一七年のタートルネックの少尉の制服を着ていた。彼女はよろよろと甥に近づき、写真を見せた。

「これが彼の写真よ」と彼女は彼に言った。「これがトム・クリーブの写真よ」

「僕は行かなければいけないんです、おばさん」と若者は言った。「さようなら、あなたは何をする必要ありません。つまり、あなたは何もしていいんです。あなたに手紙を書きます」

「さようなら、私の愛する坊や」とおばは彼にキスしながら言った。「今トム・クリーブのことわかりましたね。彼はあなたが落ち着くまで面倒を見てくれるでしょう」

「はい、さようなら」

「さようなら、私の愛する坊や」とおぼはぼんやりと言った。

「さようなら」彼は彼女の部屋から出て、もう少しで階段から落ちるところだった。

階段下の踊り場で彼は封筒を取り出し、半分に、また半分に引き裂いた。彼はこれらの紙をどうするかわからないようで、ズボンのポケットに入れた。

「あなた、全て冷めてしまいましたよ。あなたの卵とか」

「毎週彼女を映画館に連れて行くことができるよね」と彼は言った。「それぐらいいいだろう」

「『誰がいやだって言いましたか？ 私が一回でも言いましたか？』」

「いや」彼はダイニングルームに歩いていった。

---

<sup>1</sup> ジョン・ファイリップ・スーザ（二八五四年十一月六日―一九三二年三月六日）は、アメリカの作曲家、指揮者。『ワシントン・ポスト』、『星条旗よ永遠なれ』など百曲を超えるマーチを作曲した。「マーチ王」と呼ばれる。

≡  
一九二六年からアメリカで使用していたセントの切手。一九三二年から廃止となった。

一周一次不会要了你的命

J.D. Salinger

翻訳：姚明遠

当他收拾行装时，嘴里叼着一根烟，眯缝着眼以防烟钻进去；因此无法通过他的表情得知他是不耐烦还是忧虑，是恼火还是顺从。一个年轻女人像个客人似的坐在这个大块头年轻人的椅子上，在清晨的阳光在她美丽的脸庞上留下一片斑驳的倒影，但她依然很美。但最美的或许还是她小麦色，圆润而健美的手臂。

“亲爱的，”她说，“我说，我不知道为什么这些不能全交给比利去做。”

“什么？”年轻人说，他的嗓音厚重，像老烟枪一样。

“我说难道这些不能全部交给比利去做。”

“他年纪太大了，”他答道，“打开收音机吧，这时候可能会有些事先录好的音乐，试试一零一零

台。”

女人向后伸出手，她的手上戴着一枚黄金的结婚戒指，旁边的小拇指上还有一枚硕大的祖母绿宝石戒指。她先打开几扇小隔门，啪嗒啪嗒按了几下，又转了几下什么。她坐回座位上等待着，突然她丝毫不加掩饰的打了个哈欠。年轻人瞥了她一眼。

“我说，现在出发是多么糟糕啊。”她说道。

“我会告诉他们，”年轻人一边检查一叠叠好的手帕一边说，“我妻子说，现在出发太糟糕了。”

“亲爱的，我会想你疯的。”

“我也会想你的，我有比这更多的白手帕。”

“我是说，我会的，”她说道，“这一切都太令人讨厌了，我是说，一切！”

“是的，就是这样，”年轻人说，一边关上了旅行袋。他点了一支烟，看着床，然后直直地倒在上  
面。

当他伸展四肢时，收音机也完成了热身，苏萨的进行曲就用它那特有的没完没了的长笛曲段成功

占领了整个房间。

“或许还会有一些别的音乐。”

“不是现在。”

年轻人朝天花板吐了个不很圆的烟圈。

“你没必要现在就起床。”他对她说道。

“我就想这样。”

已经有三年了，她一直用强调的语气对他说话。

“不起床！”她说。

“试试五七零。”他说道。“可能有在放什么。”

他妻子又重新调了一下收音机，他们都等待着，他闭上了眼睛。过了一会儿，流淌起了比较靠谱的爵士乐。

“我说，你还有时间像这样躺着吗？”

“像那样躺着——是啊，还早呢。”

突然间他妻子看起来好像沉浸在某个严肃的想法里。“我希望他们让你去骑兵队。骑兵真是可爱。”她说。“我爱死他们衣领上的小剑了。而且你也喜欢骑马这一类的。”

“骑兵，”他闭着眼睛说道，“这种事是机会不大的。现在大家都是去当步兵。”

“那太糟了，亲爱的，我希望你打个电话给那个脸上长着东西的人。就是那个上校。上周在，菲力和肯尼，的那个。发挥你的才智，我是说你又会法语又会德语。他肯定至少给你弄个尉官。我是说你也知道如果你光当个二等兵什么的那可就太令人难过了。我的意思是你连跟人说话都讨厌，什么都讨厌。”

“求你了，”他说，“别再说了，我已经跟你说过了，尉官这事。”

“好吧，我希望他们至少能派你去伦敦。我是说那里还有些文明人。你有芭比的APO号码吗？”

“嗯。”他撒了个谎。

他妻子又陷入了另一个严肃的设想。“我想要一些材料，粗花呢啊，别的什么的。”又是突然地，

她打了个哈欠，说了句错误的话：“你跟你姨妈告别过了吗？”

她丈夫睁开眼睛，猛地坐了起来，脚踏到地上。“维吉尼亚，听着，昨晚我没机会和她告别，”他说，“我希望你每星期带她去看一次电影。”

“电影？”

“这不会要了你的命的。”他说，“一周一次不会要了你的命的。”

“不会，当然不会的，亲爱的，但是——”

“没有但是，”他说，“一周一次不会要了你的命。”

“我当然会带她去的，你这个疯子。我只是说——”

“这要求并不过分，她已经不再年轻了。”

“但是，亲爱的，我是说她的情况又变得糟糕了，我是说，她太古怪了，这一点也不好笑。我是说你没有和她一起待在屋子里一整天过。”

“你也没有，”他说，“而且，除非我带她去哪里，她从不走出她的屋子。”他朝她靠得更近了一

些，几乎就坐在床沿上，“维吉尼亚，一周一次不会要了你的命的，我不是开玩笑。”

“当然，亲爱的，我是说如果你希望的话。”

年轻人突然站起来。“你能和厨师说一声我要吃早饭了吗？”他问道，并准备到别的地方去。

“先来个早安吻吧”她说，“你这个老男孩兵。”

他弯下腰，亲了一下她美妙的嘴，然后走出了房间。

他爬上一段宽阔并且铺着厚毛毯的楼梯，在最上面的过道向左拐。他在第二扇门前敲了两下，门上钉着一张来自纽约的老沃尔道夫阿斯托利宾馆的正式白色卡片，上面写着“请勿打扰。”卡片的边缘还有一些用墨水写着褪色的字：“去爱国公债证券所，回来，六点时替我在大厅里见汤姆。他的左肩比右肩高，他用一个可爱的小烟斗抽烟。爱你的，我。”这些留言是写给这个年轻人的母亲的，当他还是一个小男孩时就读过，后来又读过上百次，此刻，一九四四年三月，他又读了一遍。

“进来，进来！”响起一阵急促的喊声，年轻人走了进去。

窗户边上，一个五十出头的美丽女人坐在折叠牌桌旁。她穿着很迷人的米色晨袍，脚上穿着一双极其脏的白色运动鞋。

“嘿，迪基·卡森，”她说，“你怎么起这么早，小懒虫？”

“有件事情。”年轻人边轻快地笑边说道。他吻了吻她的脸颊，一手随意的放在着她的椅背上，翻看着摊开在她面前厚重且包着皮封面的册子。“这本邮票集怎么样？”他问道。

“太棒了，简直真是太棒了。这本册子——你都还没看过呢，你这个坏男孩——完全是新的。比利和库克会把他们的都留给我，你也可以把你的都留给我。”

“那些停用的两分邮票<sup>三</sup>？”年轻人说，“是个好主意。”

他环视了一圈房间。“收音机怎么样？”

它被调到他在楼下的时候一样的频道。

“非常好，我今早做了锻炼。”

“现在，里娜姨妈，我要求过你別再做那些疯狂的练习了。我的意思是你会拉伤的，我是说那些没

有什么用。”

“我喜欢它们，”他阿姨翻开一页书，坚定的说道，“我喜欢他们为这个操配的音乐，都是老旋律。而只听音乐不做操显然是不太好的。”

“可以的。现在请关掉吧。请少一点完美主义吧。”她侄子说道。他绕着房间走了一会儿，然后在窗边的座位重重地坐下。他朝外望去，目光穿过公园在树丛中探寻，想要想办法告诉她，他要走了。

他曾希望她是一个不需要在一九四四年盯着另一个谁的沙漏看的女人。现在他知道他不得不把自己的沙漏给她，送给这个穿着白色脏运动鞋的女人当作礼物，这个拿着已经停用的两分邮票集邮册的女人，这个是他母亲的姐姐、曾给他母亲在老沃尔道夫阿斯托利宾馆的“请勿打扰”卡片的边缘写下留言的女人。一定要告诉她吗？她一定要盯着他那个荒唐的闪光小沙漏看吗？

“你这样摆弄前额的时候和你妈妈一模一样，真的，和她一模一样。你还有一点记得她吗，理查德？”

“记得，”他不慌不忙的说道，“她从来不用走的，总是跑着的，然后在一个房间停下歇一会儿。”

当她给我的房间拉百叶窗的时候总是在齿间吹着口哨，几乎都是同一个曲调。我还是个小男孩时它一直萦绕在我耳边，但大了就忘记了。后来在大学里，我有一个来自孟菲斯的室友，有一天下午，他正在放一些留声机唱片，有些贝西史密斯的，还有一些是提格顿的。其中一首令我震惊，那正是妈妈当年吹的调子，正是。名字叫做《在星期天我也没法老实点因为我一周七天都是坏孩子》。一个名叫阿特里维的家伙在学期末手头紧的时候踩在它上面，从那以后我就再没听到过那首歌了。”他停顿了一下，“我记得的就这么多。都是些傻事。”

“你记得她长什么样吗？”

“不记得了。”

“她就像个包袱。”他阿姨把用那纤细优雅的手托住下巴，“如果你妈妈走开了，你爸爸就无法在一个房间里像个人一样好好坐着。有人对他说话，他也只是傻傻地点点头，用他那奇怪的小眼睛盯着你妈妈离开时经过的那扇门。他是个奇怪并且很粗鲁的小男人。除了赚钱和盯着你妈妈看，他对做什么都没有兴趣。还有带你妈妈坐着他买来的那艘怪异的船出海。他原来戴一顶滑稽的英国水

手帽，他说那是他父亲的。你妈妈经常在不得不出海日子把那帽子藏起来。”

“他们就只找到了它，对吧？”年轻人问道，“那顶帽子。”

但他姨妈的目光重落回到了她的集邮册上。

“哦，这张可真漂亮。”她将一张邮票举到阳光下说，“他的脸是如此坚毅，脸上有一个像是被撞歪的鼻子。是华盛顿。”

年轻人从靠窗的座位站了起来，“维吉尼亚让厨师准备了早餐，我最好去楼下。”他说道，却并没有离开而是走到了他姨妈的小桌前。

“里娜姨妈。”他说，“请给我一分钟时间。”

他姨妈把她智慧的脸转向他。

“姨妈，嗯，马上就要打仗了。嗯，我是说你已经在新闻片上看到，在广播上还有其他地方听到了，对吗？”

“当然。”她用鼻子哼着说。

“好的，我要去了，我必须要去。今天早上我就要走了。”

“我知道你不得不去，”他姨妈说，并不慌张，也不痛苦感伤地说“最后一个”。她太棒了，他想，她是这世界上最理智的女人。

年轻人站起来，把沙漏漫不经心的放在了桌上——这是唯一的办法。“维吉尼亚会经常来看你的，老姐。”他告诉她，“她会经常带你去看电影。萨顿下周有 $\equiv$ 菲尔茨的老电影。你喜欢菲尔茨。”

他姨妈也站了起来，但是迅速地从他身边走过去。“我这一封写给你的介绍信，”她说道，“给我的一个朋友。”

她此时站在桌边，坚定的打开左手边最上面的抽屉，取出一个白信封。然后她走回放着集邮册的桌子，随意地把信封递给他侄子，“我还没封，你想的话可以读一下。”

年轻人看了看他手中的信封，上面用他姨妈非常刚劲有力的笔迹写着小托马斯·克里夫中尉收。

“他是个很棒的年轻人。”他姨妈说，“在六十九连。他会照顾你的，我一点也不担心。”她强调地补充道，“我两年前就知道会发生这样的事，我立刻就想到了汤米。他一定会对你关怀备至。”

她转过身，这次是慢慢地，然后不像之前那么快的走到她的写字桌边。

她又打开了一个抽屉，拿出一张大大的装着在相框的年轻男人的照片，他穿着一九一七年的高领少尉制服。她步履蹒跚地走向她的侄子，拿出照片给他看。

“这就是他的相片，”她告诉他，“这就是汤姆克里夫。”

“我必须得走了，姨妈。”年轻人说，“再见了。你不需要做什么，我是说你什么也不用做。我会写信给你。”

“再见，我亲爱的，亲爱的孩子，”他姨妈说着吻了吻他，“现在你认识汤姆克里夫了，他会关照你，直到你一切都安顿下来。”

“好的，再见。”

他的姨妈失神地说：“再见，我心爱的男孩。”

“再见。”他离开了她的房间，差点从楼梯上摔下去。

在楼梯下面的过道，他拿出信封撕成两半，再两半，再两半。他似乎不知道该怎么处理这些碎纸，就把他们塞进了裤袋。

“亲爱的，早饭都冷了，你的鸡蛋什么的都冷了。”

“你能每周带她去看一次电影的，”他说，“这不会要了你的命。”

“谁说过会啦？我有说过会吗？”

“没有。”他走进了餐厅。

---

约翰·菲利普·苏萨（一八五四年十一月六日—一九三二年三月六日），美国军人，作曲家，指挥家。被誉为进行曲之王。

自一九二六年起美国寄信使用两分邮票，于一九三二年不再使用。

## 訳者あとがき

J.D. サリンジャーはアメリカの重要な現代作家である。彼は『ライ麦畑でつかまえて』の作者としてよく知られているが、他にも多くの短編を出版した。一九四四年に出版された「一週間に一回ならいいだろう？」はその中の一つである。

物語は、もうすぐ戦地に行かなければいけない男性が、後に残して行く妻に叔母の面倒を見るのを託すエピソードと、叔母に最後の別れを告げるエピソードである。戦地が海外に設定しており、何も変わらないアメリカ本土の平和な生活とは明らかに対照的である。これらの登場人物が代表している二種類の人間、実際に外地で戦う男性と、銃後を守る女性の間には大きな意識のギャップがあることが考えられる。そのため、戦争は当時のアメリカ人の精神に深刻な危機をもたらしたであることがはっきり読み取れる。物語は軽く戦争の要素をタッチしたが、語る口調は重苦しい。

これはおそらくサリンジャーの強すぎる感受性と戦争（第二次世界大戦）で受けた深い心の傷によるものではないかと思われる。妻に、叔母を一週間に一回は映画に連れて行ってくれと男性は何度も念を押すことから、彼の戦争による危機感が読み取れる。「それくらいならいいだろう」。

「誰がいやだって言いましたか？私が一回でも言いましたか？」と妻は言う。叔母は廃止された二セントや切手を集めることによって、変わりつつある世の中で物事を以前のまま留めておくのに執心している。登場人物の描きから、戦争がいかに当時のアメリカ人の心に暗い影を落としているかはつきり分からせる読む価値がある作品だと思う。

最後になりましたが、投稿から掲載までお世話になった水野尚之先生、編集長を務めてくださった牧野広樹さん、よき同士である文芸表象論集分野の院生の皆さん、本当にありがとうございます。この機会をいただいたことに心からの感謝を申し上げます。

## 参考文献

J.D. Salinger, "Once a Week Won't Kill You", *Story magazine*, 1944.